

本学客員教授

エリソ・ヴィルサラゼ

ミニコンサート及び公開レッスン

2020年1月23日 池袋キャンパス A館100周年ホール



聴き終えて心地よく鼻歌を歌いながら帰る演奏会がある。これは幸せな一日だ。しかし一方で強烈なインパクトで、心臓をつかまれたような衝撃を受ける演奏会がある。これは人生で稀なる貴重な体験だ。

1月23日に行われたヴィルサラゼ客員教授のミニコンサートと公開レッスンは、明らかに後者の出来事だった。

舞台袖の扉が開くとすぐさま登場し、足早にピアノまで進んだと思いきや、イスに腰を下ろすと同時にピアノの音が806席のホール中に響き渡った。その最初の一音から、キャッチボールをしようとクラブをはめて構えていたら、いきなり超高速のボーリングの玉が飛び込んできたような衝撃だ。シューマンの圧倒的な2曲（『8つのノヴェレット op.21 第8曲』、『幻想曲ハ長調 op.17』）は、その場に居合わせたことをミューズの神に感謝するしかない。ミニコンサートはちょうど45分。会場の鳴りやまぬ

拍手に『春の夜』（シューマン＝リスト）のアンコールで応えた。

休憩後公開レッスンはスタートした。受講者は本学付属高校ピアノ演奏家コース・エクセレンス3年生の稲垣拓己さん。曲はチャイコフスキー「6つの小品」より『主題と変奏 op.19-6』。稲垣さんが弾き終わると客席のヴィルサラーゼ客員教授は即座に舞台上がり、演奏を称えたと次の瞬間にマシンガンのようなダメだし・直しがはじまった。一瞬たりとも途切れることもない。しかし「マシン」といっても決して機械的ということではなく「チャイコフスキーはカデンツァが大好きで、まったく必要もないところにでも書いているでしょ」と話すときは、おかしくてたまらないという笑顔を見せる。弾丸連射のレッスンが終わった。時計を見て「ちょうど45分。時間通り！」と満足げに笑った。通訳の小賀明子さんも秀逸だった。

もう一人の功労者、受講生の稲垣さんはすばらしかった。アレグロ・ヴィヴァーチェの指導に即座に反応し先生の要求に次々と応えていった。レッスン後はヒマラヤ8千メートルの山に登頂したような達成感と、同時に疲労感もあったのではないだろうか。これをバネにさらなる高峰を目指すことだろう。



◆ 聴講した本学付属高校生の声

・松本 奈那子さん（3年 打楽器）

「ピアノの友だちと一緒に来ました。私の専攻は打楽器です。どんな音でも、特に短い音を一音一音、大切に弾くということを学びました」

・福富 愛莉さん（3年 ピアノ演奏家コース）

「稲垣さんの演奏もすごかったけれど、それでも直すところがこんなにあるんだと驚きました。これを参考に明日から練習に励みたいと思います」